

田能村竹田の文人画論再考——「拙」およびそれ以外の主要概念との関係性について

島村 幸忠 (京都芸術大学)

江戸時代後期を代表する文人画家・田能村竹田(安永6〔1777〕年～天保6〔1835〕年)による文人画論の軸をなす概念のひとつに「拙」がある。本発表は、その「拙」の再考を通じて、竹田の文人画論の解明を目指すものである。

竹田の画論における「拙」の重要性およびその理解の困難さについては、すでに石川千佳子「田能村竹田の画論における『拙』について」(1993)、黒川泰三「田能村竹田の『拙』」(1998)などにおいて論じられてきた。これらの研究によれば、「拙」とは、それが肯定的な意味で用いられる場合には、「巧」との対立を超えたところで表現される独自性を示すものであるとされる。ところで、これらの先行研究においては「拙」の意味分析がそれ単独で行われており、結局、竹田の画論において「拙」がいかなる役割を担っているのかについての分析が行われていない。しかし、竹田の画論を構成する主要な概念は「拙」だけでなく、「迂」、「自娛」、「暢神」などもある。そして実際、「拙」は「迂」に、「迂」は「自娛」に、「自娛」は「暢神」に、それぞれが連関しあっている。それゆえ、それらの概念との関係性のなかで「拙」を捉えなければ、「拙」の重要性や意味を十分に理解したことにはならないのではないだろうか。あるいはまた、他の文人による画論との比較も行われてこなかった。竹田が活躍した時代は、坂崎坦が『日本画の精神』(1942)にて指摘している通り、日本の文人画論の最盛期であった。

以上の問題意識のもとに、本発表では、まず、竹田の画賛を集めた『自画題語』(前編は文政12〔1829〕年、後編は天保12〔1839〕年)や文人画論『山中人饒舌』(天保5〔1834〕年)などを参照しつつ、「拙」がいかに論じられているのかを再確認する。その際、前掲の研究では、中国の文人たちによる「拙」の使用の歴史的変遷が看過されているので、その点も考慮に入れつつ考察する必要があるだろう。次に、竹田の盟友のひとつである浦上春琴(安永8〔1779〕年～弘化3〔1846〕年)の『論画詩・続論画詩』(天保14〔1841〕年)において「拙」がどのように論じられているのかを確認し、竹田における「拙」を相対化すると同時に、その独自性を確かめる。最後に、竹田の画論において、「迂」や「自娛」などの概念を介して、「拙」と「暢神」が結びついていることを示す。そうすることで、画業における技術的な問題や文人の渡世の問題だけでなく、「拙」が養生の問題にも通じる概念であることを明らかにする。